

平成29年度 校内研究計画

I 研究主題 かかわり合いながら、豊かに表現することのできる児童の育成

～国語科の物語文における授業づくりを通して～

II 主題設定の理由

1 学校教育目標の具現化から

本校では、「自ら学び 心豊かに たくましく生きる子どもの育成」を教育目標に掲げ、

○「思いやりのある子ども」(徳)

○「進んで学ぶ子ども」(知)

○「体をきたえる子ども」(体)

をめざし日々の教育活動を行っている。

本主題は、児童の学習への関心意欲を高め、国語科の話す・聞く活動と読む活動、書く活動を関連させた指導を通して表現力を高め、「進んで学ぶ子ども(知)」を具現化しようとするものである。

2 今日的な課題から

国際化や情報化の進展、価値観の多様化など、大きく変化しつつある社会において、子どもたちが「夢や志」をもった一人の人間として、力強く生きていくためには、主体的に判断し行動する資質・能力を一層確実に身に付けていかなければならない。そのためには「論理的な思考力」「表現力」を身に付けることが重要である。

学校教育においては、知・徳・体のバランスとともに、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等及び学習意欲を重視することが教育基本法、学校教育法で規定されている。また学習指導要領には、「国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育て、実生活で生きてはたらし、各教科等の基礎ともなる国語の能力を身に付けることにより、我が国の文化を享受し、継承発展させる態度を育てることに重点を置いて内容の改善を図った」と、改善の趣旨に述べられている。このことから、文章や情報を正しく理解し、必要な情報を吟味し、論理的に思考し表現する能力の育成、並びに言葉で伝え合う能力の育成が求められているものと考えられる。

3 児童の実態から

本校の児童は、明るく素直な児童が多く、学習活動や行事等の課題に対して一生懸命に取り組む姿が見られる。アンケート結果から、自分の考えを短時間でノートにまとめる活動については、8割の児童が「できる」「まあまあできる」と答え、自信をもつことができるようになった。反面、授業や学校行事での発表場面では、声が小さく自分の考えを相手に伝えることを苦手とする児童が見られる。また、分からないことがあった対応策として「辞書で調べる、友達やうちの人・教師に聞く」と答えているが、分からないままにする児童も多くいる。

平成28年4月と12月に行った学力診断テスト(東京書籍)の結果を比較(表1)すると、どの学年でも「書く力」が2.5～1.6ポイント上昇している。これは、研究の重点として自分の思いや考えをもたせる際に、ノートやワークシートに書く活動を取り入れていたことが要因と考える。また、「読む能力」についても微増している。これも、「書き込みノート」や「新聞を読もう」等、文章に親しませる取組が役割を果たしていると考えられる。それに対して「活用」や「話す力・聞く力」については多くの学年が下回る結果となっており、改善が求められる。

こうした結果から、本校児童の学力を向上させるために基礎基本の学習をさらに充実させ、これまで行ってきた手立てを基盤とし、主体的に表現する力や活用力を高めていくことが必要であると考える。

学 年	1学年		2学年		3学年		4学年		5学年		6学年	
	12月スコア	差	12月スコア	差	12月スコア	差	12月スコア	差	12月スコア	差	12月スコア	差
基礎	82.5		78.6	-5.8	73.1	-5.2	65.5	0.4	78	11.7	76.6	4.9
活用	53.3		59.4	4.4	54.2	-2.4	33.9	-21.5	42.3	-23.9	47.8	-1.7
観点1(話す力・聞く力)	83.9		76.3	1.3	64.5	-7.8	49.8	-20.5	77.6	8.4	61.6	-6
観点2(書く力)	79.2		71.2	2.5	65.3	8.5	70.5	3.1	59.1	10	78.4	16
観点3(読む力)	60.8		66.3	0.9	62.4	2.7	54	-2.8	65	2	70.8	9.1
観点4(言語事項)	85.2		78.8	-13.3	73.7	-12.5	59.7	0.7	76.5	3.4	69.9	-1.3

(表1) 平成28年度学力テスト国語科における12月の結果と4月結果とのスコア比較

4 これまでの研究の成果と課題から

平成28年度は、平成25年からの3年次計画を引き継いで取り組んだ2年次計画の1年目であった。児童が「かかわり合いながら、豊かに表現すること」を目指し、「自分の思いや考えをもたせるための指導の工夫」と「単元の言語活動を意識した単元構成の工夫」を手だてとして取り組んだ。

「自分の思いや考えをもたせるための指導の工夫」では、「豊かに表現する」ために、事前に本時の学習課題を提示することで、児童が自分の思いや考えをもって授業に臨むことができるようにした。また、平成25年度から取り組んできた「書き込みノート」を継続して活用し、文の構成や大事な言葉に注目しながら教材文の読解に取り組むことで、児童が理解を深めたり、考えをもったりする際の一助となるようにした。その結果、児童が本時の課題を把握しやすくなり、家庭学習で自分の考えをノートやワークシートに書いて授業に臨むので、自信をもって発言する姿が見られるようになった。教師側も事前に児童のノートやワークシートを確認することで、児童の考えを把握でき、意図的指名に繋げることができた。

「単元の言語活動を意識した単元構成の工夫」では、「単元計画表」を用いることで児童が見通しをもって学習を進めることができるようにしたので、授業時の円滑な導入に繋がった。

しかし、児童が自分の思いや考えをもつことはできるようになったものの、それを「かかわり合いながら、豊かに表現する」ことには課題が見られた。そのため、教師は児童の考えを発問や板書等で深めたり、整理したりすることが必要であると考えた。その上で、児童がかかわり合うことができるような課題設定や、発問、場の設定を展開していく必要がある。

Ⅲ 研究主題のとらえ方

・「かかわり合いながら」とは、

実態の異なる児童一人一人が、問いを仲立ちとして、教材、友達、教師、自分自身とかわる中で、学びを豊かにし、新たな問いをもって学び続けていくことのできる授業をめざす。学級集団において「人間と人間の関係の中で互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通し適切に表現したり正確に理解したりする力」を「教材とのかかわり」「他者とのかかわり」「自分自身とのかかわり」の中から育てていく。

本校では、授業のねらいに到達するために、教科の本質をしっかりととらえ、教材の価値を見極めることを大切にしている。教材の価値を児童の実態に即してとらえ、授業を展開していくことが児童の学びを高めていく上で重要であると考えた。また自分の考えを発表するだけでなく、相手の考えを受け止めて理解し、意見や感想を述べるなど双方向の伝え合い、読むこと、書くことを総合した姿をとらえる。児童が話すこと聞くことの技術を身に付け、読み取ったことや書いたことをもとに相手意識をもちながら伝え、それを受け止めて理解し、他者へ返すことを繰り返しながら理解をさらに深める。以上のことを踏まえて自分自身の学びを理解し、自己肯定感をもって学び続けていく児童を育てていくために、「3つのかかわり」を大切な視点として位置付けている。

・「豊かに表現することのできる児童」とは、

「言葉を適切に使って伝えたいことを正確に伝えたり、言葉で表現したい思いを豊かに表現したりする」「言葉を手掛かりにし、言葉と言葉の関連をとらえて内容を正しく読み取ったり聞き取ったりする」「一人一人が考えをしっかりとち、互いの立場や考えを分かり合おうとする気持ちをもって、言葉を通して適切に表現したり、正確に理解したりする」資質や能力を伸ばし、その結果、読みが深まり音読が上手になる。読みが深まるのは授業の中で互いの読みを出し合いながら、よい読みに出会い、学び合うことができるからである。国語科において、自分の力で読み深める楽しさを味わい、自分の思いや考えを、自分の言葉で進んで書いたり、伝え合ったりすることができ、萎縮せずに様々な方法で自分自身を豊かに表現できる児童ととらえた。

IV 研究目標

国語科の物語文の授業づくりを通して、児童が主体的にかかわり合いながら、自分の思いや考えを豊かに表現することができる児童の育成を目指す。

V 目指す児童像

< 具体的な姿 >

低学年	中学年	高学年	特別支援
○文章の内容と自分の経験を結び付けて自分の思いや考えをまとめ、相手の話を聞きながら話題に沿って話し合うことができる児童	○文章を読んで考えたことを発表し合い、互いの共通点や相違点を考えながら聞き、一人一人の感じ方の違いに気付く児童	○本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる児童	○日常に必要な国語を理解し、思いや考えを表現できる児童

< 行動目標 >

	低学年	中学年	高学年	特別支援
話すこと	○声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話すことができる。 ○互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合う事ができる。	○自分の意見を理由や事例を挙げたり、筋道を立てたりして適切な言葉遣いで話すことができる。 ○互いの考えの共通点や相違点を考え、話し合うことができる。	○目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら話すことができる。 ○互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うことができる。	○自分の気持ちや意志、希望などの大体的内容を話したり発表したりすることができる。
聞くこと	○話し手を見て、大事なことを落とさないようにしながら興味をもって聞くことができる。	○話し手を見て、表情や態度で反応しながら、話の中心に気を付けて聞くことができる。	○話し手を見て、表情や態度で反応しながら、話し手の意図をとらえ、自分の立場や意見をはっきりさせながら聞くことができる。	○話し手を見て、表情や態度、言葉で反応しながら聞くことができる。
書くこと	○分かったことや考えたことが明確になるように、つながりのある文や文章を書くことができる。	○書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くことができる。	○事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりすることができる。	○自分の気持ちやしたことを簡単な文章で書くことができる。

<見取る子どもの姿>

表	◇諸感覚（視覚，聴覚，触覚，味覚，嗅覚など）がはたらく。 ◇感情（喜・怒・哀・楽など）に変化が起こる。 ◇諸感覚のはたらき，感情の変化とともに（驚き，ひらめき，戸惑い，迷い，感銘，感動など）が起こる。	◇自分自身の問いをもつ。 ◇集団の中で，問いを集約した課題や学習問題などに意欲をもつ。 ◇問いに対して（欲求・願望・要求・不満・納得・感得など）をもつ。
現		
見取る姿	じっと見つめる・目を閉じる・目をうばわれる・ほほえむ・呆然とする，ため息をつく，涙を流す，歓声を挙げる・ふるえる・体の部位が自然と動くなど	凝視し続ける・強い視線を向ける・顔を伏せる・一つのことにこだわる・何度も繰り返すやり直す・体の動きが止まる・体の動きが機敏になるなど
	つぶやく・口ずさむ・うなづく・首を傾げるなど	

VI 研究の視点

・「かかわり合いながら，豊かに表現する力」を高める手立ての工夫

視点① 教材を深く学ぶためのかかわり合い，練り合いの指導の工夫

- ・場の設定の工夫
- ・学習形態の工夫

視点② 自分の思いや考えをもたせるための指導の工夫

- ・課題設定の工夫
- ・児童の考えを深め，変容を生み出す発問の工夫

研究を支える側面

◎表現力向上のための指導

- ・音読指導（朝会での学年発表，学年部または学年朗読会など）
- ・朝の活動（上学年：新聞を読もう 下学年：スピーチ 読み聞かせ 暗唱など）
- ・総合的な学習の時間及び生活科での発表・異学年交流学习

◎言語環境の整備

- ・国語の意識を高める掲示（発表物，ノートや書き込みなどの提示 階段掲示等）
- ・関連図書との並行読書活動の推進（読書タイム，図書館教育と連動した読書コーナーの設置など）

○学習規律の確立（学習の約束の徹底，はじめのある学習規律）

○「学力向上のための5つの提言」を生かした授業づくり

○p 4 cの活用

○ユニバーサルデザイン化の推進

○ミニ授業研究の実施（初任研関係の提供授業）

研究の基盤となる取組

◎28年度までの取り組み

- ・学年段階における説明文学習のための「読む」「書く」ための具体的な指導
（例：問いと答え，主述のとらえ，段落意識，文章構成，要点，要旨，要約，感想，小見出し等・・・27年度までの研究から）

- ・ 伝え合いを意識した書く活動
- ・ 書き込みノートづくり（学習計画表含）
- ・ 伝え合いにおける行動目標（話す・聞く，声の出し方，話形等）の具現化
- 発問の精選
- 課題設定の工夫
- 生徒指導との連携による家庭学習の習慣（書き込みノートを活用したレディネス学習，学習カード，課題の期限内提出）
- 家庭学習の手引きの周知徹底
- 放課後パワーアップタイムの設定（算数科）
- 学力向上対策プリント作成（国語科・算数科）

Ⅶ 研究の進め方

（１）研究の基本方針

児童の意欲の喚起と確かな学力の定着につながり，教師も実践力が高まる研究を目指す。

- ・ 研究の視点に沿った具体的な手立ての有効性を授業実践を通して検証していく。
- ・ 児童の「表現する力」の向上のための手立てを講じた授業を日々行い，実践を積み重ねる。

（２）研究の内容と方法

① 研究主題に関する理論的な研究

- ・ 文献や先行研究実践事例を調べ，多くの情報の中から研究につながるものを収集する。
- ・ 国語科の論理的思考力や表現力を高める指導について研修する。

② 研究主題に関する児童の実態調査

- ・ 意識調査（５月，１２月）学力到達度診断（４月・１２月）などから，その変容を調べ分析し，日々の授業に生かすようにする。

③ 研究授業の実践

- ・ 全学級１授業を提供する。
- ・ 指導案の事前検討は学年部で行い，研究主任は全ての事前検討に参加し，授業者の提案を確認しておく。
- ・ 事前に模擬授業を行い，意見の交流を通して発問等の精度を上げる。
- ・ 学年部で授業記録（教師の発問や児童の反応などを文章化）を行い，事後検討会における検証に生かす。また，児童のノート・写真やビデオ撮影を行い検討会で活用したり，付箋紙を使ってKJ法によって焦点をしぼった話し合いにしたりして，話し合いを深める。

④ 研究授業後の児童と教師の変容と評価

- ・ 実態調査や評価テスト，総合的な学習の時間，学校行事での発表などで把握する。また，その結果を基に研究の評価を行う。

⑤ 研究のまとめ

- ・ 研究授業後，授業内容や検討会の振り返りを研究部だよりにまとめ，その都度共通理解を図る。また，授業実践記録を分析し，研究の成果と課題を明らかにして研究のまとめを行い，研究集録を作成する。

(3) 運営について

① 研究全体会（構成…全職員）

研究推進協議，理論研究，授業研究，実技研修などを行い，職員の共通理解を図り，研究の深まりを目指す場とする。

② 研究推進委員会（構成…教頭，教務，研究主任，各専門部部長 学年主任）

研究を円滑に推進するために，研究計画，方向，理論などについての内容検討や連絡・調整，研究全体会の企画・運営にあたる。

③ 授業研究部（低学年部・中学年部・高学年部・特別支援部で授業研究にあたる）

低学年部・・・◎佐藤裕 梅津 大場 佐藤妙

中学年部・・・◎小山 阿部日 鈴木

高学年部・・・◎齋藤 高橋脩 高館 高橋達 高橋律

特別支援部・・・◎佐藤妙 鈴木 高館

④ 専門部（学習習慣部・調査資料部・表現力向上部）＊先頭がチーフ

学習習慣部・・・◎佐藤妙 佐藤裕 齋藤 高橋脩

調査資料部・・・◎大場 阿部日 高館

表現力向上部・・・◎小山 梅津 高橋達 高橋律

・学習習慣部

「学習の約束」「ノートの使い方」「机上の整理」「家庭学習の手引き」「学習カード」「既習事項」「言語事項」に関する資料収集やユニバーサルデザイン化を意識した教室掲示などの提案をする。朝の活動における読書タイム，音読タイムの取り組みの計画をし，図書館教育と連動した読書の推進を図る。

・調査資料部

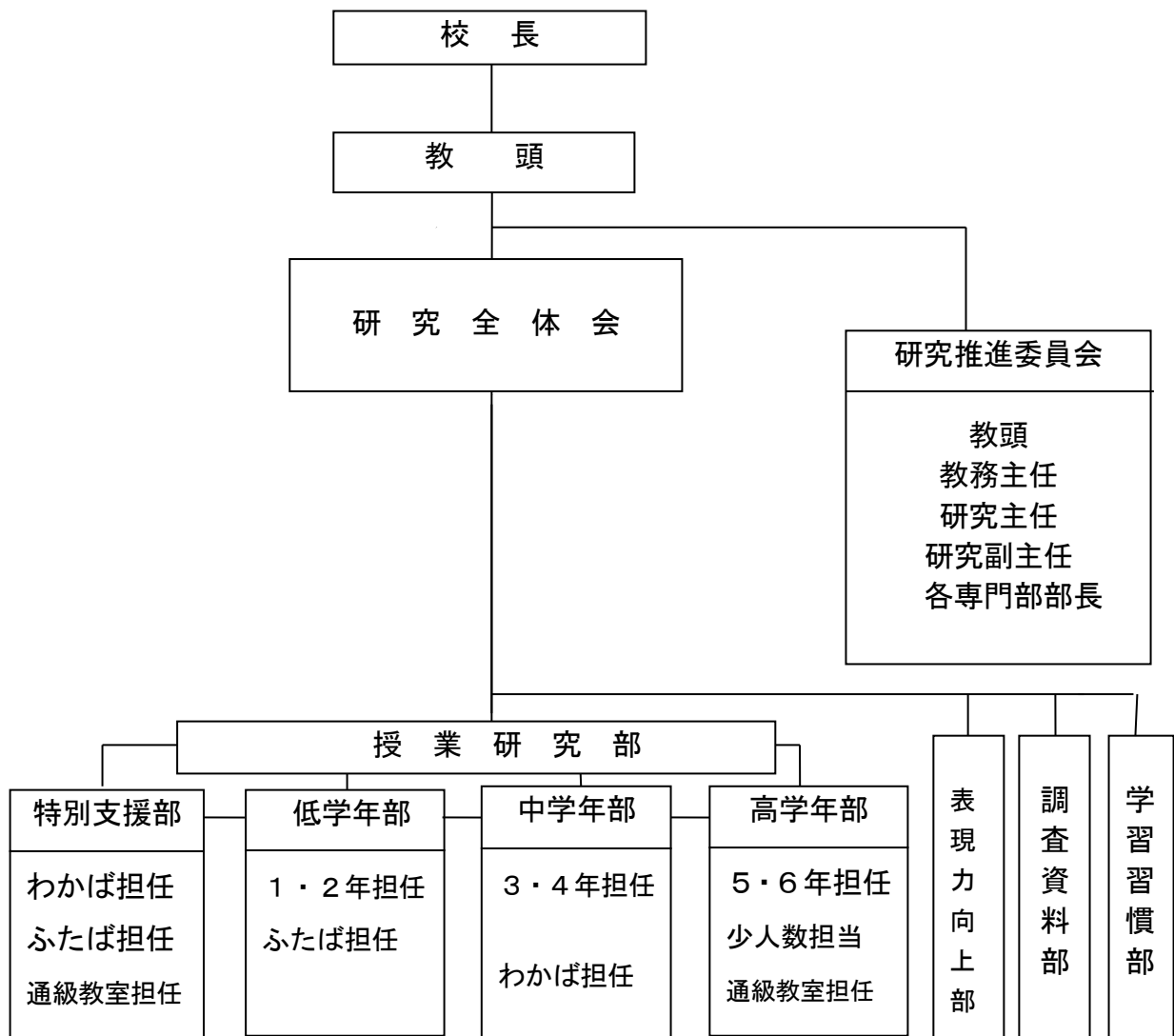
児童の実態と変容をアンケート等で調査し，調査結果の集約と分析をする。また，学力検査の分析を行う。

・表現力向上部

児童の表現する機会を増やし，目に見えた掲示をしていく中で，上手な表現を参考にさせて，表現力を向上させていく。学力向上，表現力向上のための朝の活動で取り上げる教材（新聞記事・スピーチ原稿・詩等）の選択・準備，校内掲示を行う。四字熟語や英語の階段掲示により，児童の知識の向上を図る。

(4) 学力向上成果普及教員等を活用したり，先進校の取組を視察・研修した内容を報告したりして共通理解を図る。

VIII 研究組織



IX 研究計画

- 1年次（平成28年度）・・・研究主題，副題，研究の視点と手立て等，研究の方向性を決める。
学習内容の系統性や単元構成の作成の仕方について研修し，共通理解を図る。
- 2年次（平成29年度）・・・授業実践を通して手立ての効果を検証し，改善を加え，授業モデルを明らかにする。児童の表現力を高め，集団解決を充実させる。